

「冬野」

今、三里塚の野に稜線に沈もうとする大きな豎琴のような夕日がかかっている。
きちんと整備された畑に霜が降りている。

風の音が途切れることのない琴の音のように鳴り、白色の一番星が鍵（線が太いので鍵と表現したのでしょうか）の最高音を奏でている。

冬はいつもそうだが、畑は古代のように一面何もない広野そのものである。
春はまだ遠いが、夕陽が暖かいのであろう、霜が水蒸気となってゆらゆら立ち上り、春が来る予感が感じられる。

私は麦の種（重いというので麦ではないか）を暮れようとしている畑に、暖かい夕日のように頑張っていて、撒けば必ず芽を出してくれる種を信じて種をまく。
種は土に（重いという単語を使うことで沈むに掛けている）かしづくように根が深く潜っていき、幾夜も土の中で過ごし、徐々に土の上に芽を出し、ゆっくりと遠かった黎明を見るために。

ある時期にすべての芽が出そろう（きよらか：穢れのないこと・澄んだ凝縮：散漫であったものがまとまること）、むら（デコボコ）が有った畑がきれいに蒼くなる。
それを見ていると周りは静かではあるが、私の心には敬い慎み賛美する歌が浮かんでくる。

そして聞こえてくる。取り入れの時期には祭りのようににぎやかな音が。そして、燃える様に暑い昼には、麦の穂が揺れ、カワセミ色の海のようにキラキラ輝く青々とした六月を思い描く。

「最後の雪に」

田舎の我が家（東京府豊多摩郡高井戸）の庭で冬の終わりのころ、花びらのような雪が降っている。ほかの雪に比べて上品な降り方の老嬢（若くない雪の精たちが）憂鬱（もう次降るのが1年も先の事なので）そうに朝からワルツを踊るように（降っているように）自分には思える。

それを見ながら早春の夕方に、透明な運河に水が流れ、船で働く人々の生き生きとした様の詩（光明の詩を）書いている。

雪はそこら中に降っているが、雪の精よ私が表現できないその高貴さを詩に書いて欲しいものだ。やがて遙か遠い地平線から、そよ風とひばりという春の先駆けを送ってくれと、私は古い書きかけの詩（光明の詩）に私はまた書きたいという愛着を感じる。

雪の精たちの昔（あの）の冬最後のワルツをみた時のように。
私の心の中で思い出す楽しい記念としての光明の詩のために。

注：光明 将来への明るい見通し

光明の詩 調べた限りこの詩は実在しない（雪の精が詩に書き足してくれなかったからか）

又、最後の雪とは何故に最後なのだろう、もう二度と雪の精たちのワルツが聴けないことを予感していたのだろうか。